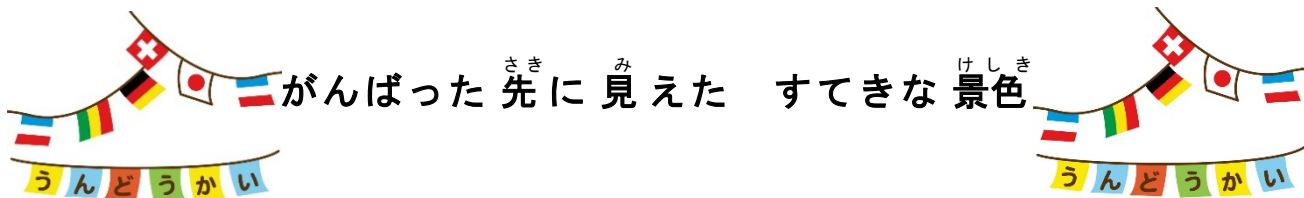


横川っ子だより



5月25日、待ちに待った運動会の日を迎えました。

「つなごう！ 絆のバトン！」をスローガンに、子どもたちは一生懸命、練習を積み重ねてきました。そのプロセスがあつての当日、子どもたちが一回りも二回りも成長した姿に、数々のドラマがありました。

★6年生、最後の運動会で魅せた組体操。形をそろえ、心がそろそろ美しく、力強さに鳥肌が立ちました。

★5年生、台風の日。4人が、まるで呼吸まで合わせるように共に行動していて、チームワークが光っていました。

★4年生、よさこいソーラン。鳴子が一点に集まったリズム、迫力あるかけ声、ダイナミックな動きに思わず体が動き出しました。

★3年生、竹取物語。竹を取りに足の速い人が猛ダッシュして、置いてある竹の半分より多くをつかみ、そこを起点に味方がどんどん竹につかまり引っ張る作戦が見事でした。

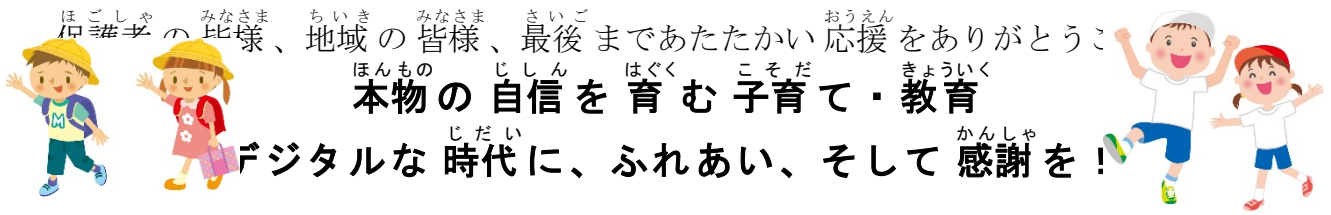
★2年生、子ぎつねたちのおどり。一人一人が役になりきり、音楽に合わせて動きがよくそろっていました。難しい隊形移動も大成功でした。

★1年生、初めての運動会はわくわく元気。徒競走、ゴールをめざして最後まで走りきりました。一個でも多くかごに玉を入れようと、最後まであきらめませんでした。

★そして、みんなのための委員会活動。全力で走って演技の準備、後片付けをする姿に、運動会に対する熱い想いが伝わってきました。

子どもたちは、運動会までのプロセスで、人と人とのかかわりの中で、連帯感や責任感を学び、学級・学年の絆を深めてきました。だからこそ、勝ち負けに関係なく、自分のため、チームのために全力でがんばれたと思います。子どもたちは、がんばった先のすてきな景色を見ることができたと思います。

一生懸命はかっこいい、一生懸命はうつくしい、一生懸命は人に勇気を与える。



5月23日、知多地方小中学校PTA連絡協議会総会に参加させていただきました。

その中で、臨床心理士でスクールカウンセラーでもある、山口力先生の記念講演があり、とても感銘を受けましたので、以下に紹介させていただきます。

「デジタルネイティブ」という言葉があります。これは、インターネットのある環境で生まれた世代のことで、コミュニケーションの仕方や考え方がこれまでの世代とは異なります。

例えば、「コンビニのおにぎり」と「家の人がにぎったおにぎり」、どちらが好きかと問われたらどうでしょう。コンビニは、だれが食べるかわからない人を対象に、機械がにぎっていて、味という刺激（結果）を求めています。家の人は、人のために愛情を込めてにぎっていて、そこにはプロセスがあり、ふれあい（心）を求めています。

人は、心が空くと、自己否定や逃避が始まります。だからこそ、心の栄養が足りない人には、結果ではなく、プロセスに目を向けながら、人と人のふれあいを大切にしたいです。

親に言えなかった子どもの心の叫びに耳を傾けてみると、子どもは、「失敗しても許してほしい」「もっと褒めてほしい」「もっと一緒に遊んでほしい」と思っているようです。

「自信がない子には、日常を褒める、当たり前を褒めることが大切」

- ・ あなたならだいじょうぶ
- ・ おうえんしているよ
- ・ やればできるじゃん
- ・ あなたがいてくれてたすかったよ
- ・ ~してくれてありがとう
- ・ しっぱいしてもだいじょうぶ
- ・ しんらいしているよ
- ・ いつでもみかただよ
- ・ あなたがいてくれてよかったよ
- ・ がんばったね（いっしょにがんばろう）



子どもの心の扉を開ける鍵は、2つあります。1つは、「理解」の鍵です。これは、教員や親がもつもので、子どもに居場所を与え、安心感につながります。もう1つは、「ありがとう」の鍵です。これは、子ども自身ももつもので、今あるものに感謝するこ



とで、^{きもち}気持ちが^{あか}明るくなったり、やる^き気が^で出てきたりします。

^{しっばい}失敗は^{せいこう}成功のための^{せいこう}成功です。

^{しっばい}失敗は^{しっばい}失敗ではなく、^{しっばい}失敗を^{おそ}恐れたときに^{しっばい}失敗です。